いつも何度でも笑いなさい

中山順仁

ぼくたちが暮らしていた穏やかな町に、突然地震が襲った。
「がたっ、がたっ～」
「がたっ、がたっ～」
「おにいちゃん、おにいちゃん、怖いよ～」
ぼくは、必死におにいちゃんのシャツのすそをにぎった
「だいじょぶだよ」
おにいちゃんはぼくの手をにぎりながら言った。
それでも地震は　ぼくたちの家を揺らし　地面にたたきつけ部屋の中はぐるぐる回った
家が逆さまになったように　天井からものがいっぱい降ってきた
地震は弱くなって　それでもビリビリうなってた
「おーい　だいじょうぶか」
お父さんの叫ぶ声がした
「お父さん　こっちだよ」
おにいちゃんの声でぼくは目をあけた
部屋の窓ガラスは割れて　部屋中ぐちゃぐちゃになっていた
ぼくとおにいちゃんは机の下でうずくまっていた
お父さんの側にいった　お母さんは用事で漁港に行っている
「お父さん　お母さんは大丈夫かな」
ぼくは心配になった
しばらくしてお父さんの携帯に　お母さんから電話があった
「お母さんは無事らしい」
お父さんがそう言うと

おにいちゃんが泣き出した
ぼくも泣いた
怖くて　怖くて　とても怖かった
「おーい　みんな逃げろ」
「津波がくるぞ」
外から大きな声がした
お父さんが言った
「外に逃げるぞ」
外に出ると　まわりの家がつぶれて　ぺしゃんこになっていた
「二人とも車にのれ」
お父さんの声で　ぼくらは飛びこむように車に乗った
後ろを見ると　海が砂浜のずっと向こうまで
黒い大きな壁になって　どんどんこっちにやってくる
港の船も　家も　公園の木も　そして車も　人も　黒い大きな壁に　呑まれて
やってきた
「お父さん　海がくる」
ぼくは言った
お父さんは　声もださずに道路を走っていた
ぼくはお父さんの顔をみて　また怖くなり
おにいちゃんの服をつかんだ
「お母さんは　どうなったのかな」
ぼくが言ったけど　お父さんも　おにいちゃんも返事をしなかった
静かだった　遠くでサイレンの音が聞こえるだけで静かだった
空はいつものように青く静かだった
ぼくたちの車は　山に登って行った
山の公園には　多くの人がいて　静かに海のほうをながめていた
黒い大きな壁は　川のようになって
ぼくらの穏やかな町も　田んぼも畑も　みんな呑み込んでしまった
それからぼくたちは　避難所に移った
「お母さんはいない」

避難所は多くの人でごった返していた
ぼくらの町に　大変なことが起こったんだ
お父さんは　お母さんに何度も電話をしている
おにいちゃんは　ぼくの手を握っている
まわりは　ざわざわと騒がしいのに
ぼくたち三人は静かだった
お母さんは用事で漁港に行ってたから
黒い大きな壁に呑まれたのかもしれない
お母さんが　いなくなっちゃう
そう思うと　ぼくはわんわん泣いた
涙が流れて　流れて　流れていった
その夜　お母さんは　帰らなかった
お母さんの　笑い顔は　帰らなかった
黒い大きな壁が　ぼくらのお母さんを奪っていった
涙が流れて　流れて　流れていった
黒い大きな壁は　静かになった
地震は何度もビリビリゆれて　また大きくゆれた
夜が明けて　いつものように太陽が港を照らした
でも　いつもの港じゃなかった
青い空がいつものように笑っている
太陽も空も　港も町も　静かだった
お母さんが　ぼくたちに笑っているように見えた
「頑張るんだよ」
「いい子になるんだよ」
「お母さんは　いつも一緒だよ」
「寂しいときは　空を見て泣きなさい」
「悲しいときは　海を見て叫びなさい」
「うれしいときは　太陽のように笑いなさい」
「そして　いつも何度でも笑いなさい」
「寂しいときも　悲しいときも　笑っていれば大丈夫」

「いつも何度でも笑いなさい」
「お父さん　ありがとう」
「みんな　ありがとう」